

みんなの暮らしぶりから考える 本当の地域づくり

～支えあい・助けあいを地域に返そう！～

私たちの暮らす地域では、さまざまな人がさまざまなカタチで日常を送っています。そして、その暮らしを応援する、豊かにするボランティアや地域活動があります。

この分科会では、ひとりひとりの暮らしぶりからつなげる・つながる「まちづくり」をみんなで考えます。



ファシリテーター

お名前 酒井 保さん

所属 ご近所福祉クリエイション

略歴 1961年広島生まれ。知的障がい者施設職員、社会福祉協議会福祉活動専門員、認知症グループホーム・小規模多機能施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設（主宰）。講演・執筆活動を行っている。イラストレーターとしても活動中。「つながりを切らない情報・交流ネットワーク」に「週間マンガつながる通信」を掲載。

書籍等 『「見守り活動」から「見守られ活動」へ』（CLC発行） 『元気を生み出す！ご当地サロン/新しい総合事業大見本市』（CLC発行） 『生活支援コーディネーターと協議体』（CLC発行）



ゲストスピーカー

お名前 根本 房枝さん

略歴 長野市に在住。地域で自分たちも一人の住民として「そこで暮らす地域の人たちと生活したい！」と熱い想いを持って、サロンを立ち上げや婦人部の部長など、幅広く地域で活動中。県下初の電話交換手。

お名前 山口 和子さん

略歴 長野市の視覚障がい者への朗読ボランティアグループ「やまびこ会」会長。目の不自由な方たちに耳からの情報を送ることで、少しでも社会参加のお手伝いができたらと活動している。

参加する皆さん！

ぜひ、普段感じている思いや悩み、課題などみんなで共有して考えてみませんか。



視覚障害者への朗読ボランティアグループ

やまびこ会

代表 山口 和子

昭和 58 年、目の不自由な方達に耳からの情報を送ることで、少しでも社会参加のお手伝いができたらと発足しました。視覚障がいの方達の日常生活の自立支援、社会参加の支援のための朗読テープ・CD 作りをしています。

【会員 46 名 (男性 3 名・女性 43 名)】

◆視覚障害者へのボランティアには

- ・朗読 (音訳)
- ・点訳
- ・外出ガイド
- ・拡大写本



◆主な活動

- ・やまびこテレホンサービス (224-1122) 毎日
- ・情報テープ・デイジー “長野だより” “かわらばん” 作成 . . . 月 3 回
- ・市議会だよりテープ化・デイジー化 年 4 回
- ・視障協通信テープ化・デイジー化 年 4 回
- ・信濃毎日新聞連載小説 (朝刊・夕刊) テープ化・デイジー化 . . 月 4 回
- ・依頼された図書のテープ化・デイジー化 随時
- ・対面朗読 随時
- ・利用者との交流 年 1 回
- ・勉強会
- ・その他



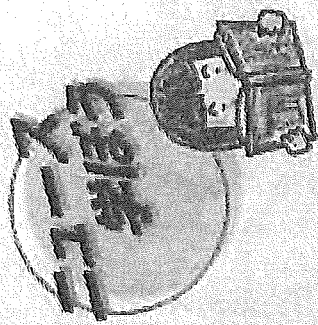
障がいを持ったということは不便ではあるが不幸ではない。不幸であってはならない。

⇒応援してくれる人達がいるということは、生きていく自信につながる。

⇒生きていけるんだ！

生きていてもいいんだ！

音訳ボランティア



視覚障害などで自分で本を
読むことが難しい人のため
に、文字などの情報を音に
して伝える「音訳ボランティア」
という活動があります。松
本市で活動する音訳ボランティア
「ひびきの会」が担い、作業
をお押し合って正確に聞き取
りやすい口添いの「録音図
書」を作っています。

読めない人に情報伝える

制作します。

朗読する人は文章に出てく
る地名や人名、専門用語など
の読み方、正しいアクセント
などを調べることから取りか
かります。文字だけでなく音
の響きなども工夫して言葉
で説明します。録音後は、
自分や校正担当の人が間違い
がないか、音だけで意味が
分かるか確認し、必要があれば
修正します。編集作業で
は、利用する人が便利になる
ように音に注釈を挿入しなが
ら作業します。

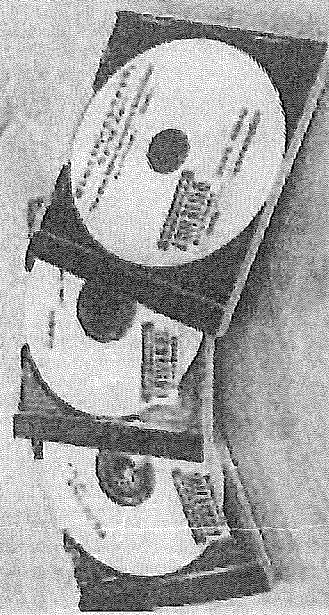
合計は15時間となっていま
す。それでも、音でなければ
本の中身を知ることができ
ない人たちが楽しみに待て
いて、受け取ったときには
感謝の言葉を掛けてくれる
ため、途中で押されて頑張っ
ています。

会代表の渡辺規子さんは
「世の中にはたくさん人の
不便があるのに、音訳化さ
れているものはわずかしかあ
りません。ほんの少しでもお
手伝えたければ」と願ってい
ます。(録音 希)

音訳の対象は、大きく分け
て▽市の広報や公民館報とい
った公共印刷物▽個人の
利用者から依頼を受けたも
の▽図書館などに提供したも
の3種類があります。個人依頼
のものは幅広く小説、雑誌、
家書、取扱説明書や会議の
資料なども含まれます。

ひびきの会では、正確さを
重視する図書館用には朗読
(録音)・校正2人・編集・
編集校正の3人体制、スト
ーを優先する個人依頼のもの
は朗読・校正・編集の3人体

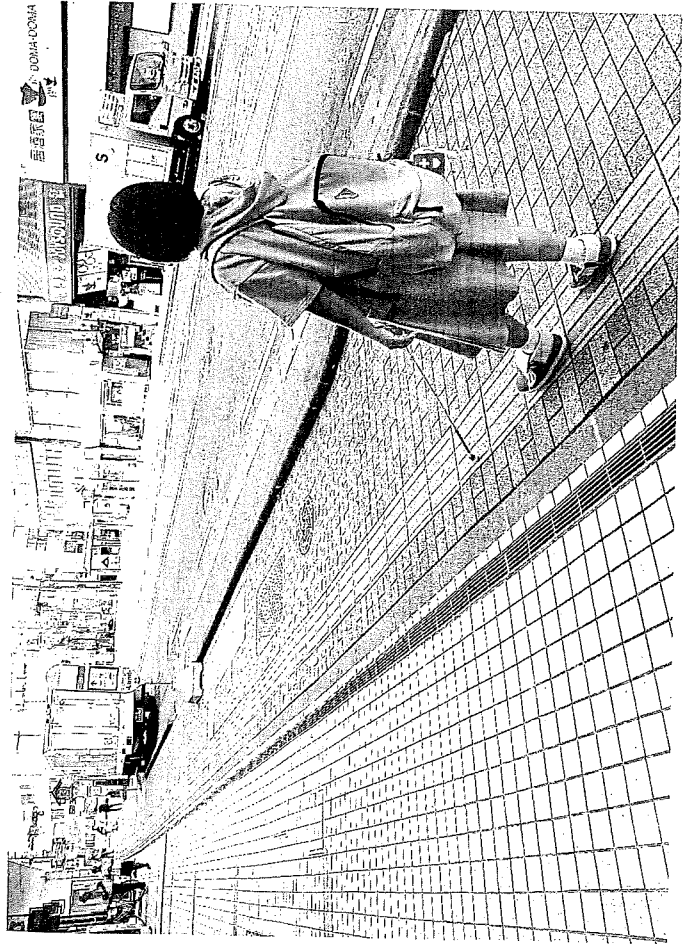
松本市中央図書館が所蔵
する録音図書の一部



こうした作業は驚くほど多
くの時間と手間が掛かりま
す。ある作品は3時間24分の
生上がりに対して作業時間の



音訳ボランティアを依頼する人たちが
技術を学んでいる録音図書



歩きスマホとみられる人とぶつかった場所を歩いた女性。足に傷が残る、白杖も新品を取り寄せた＝長野市

点字ブロックの上 歩きスマホと衝突

白杖を持ち点字ブロック上を歩く視覚障害者が、スマートフォンへの画面を見ながら向かって来た人とぶつかる。そうした事例が近年、県内でも増えているようだ。当事者や関連団体によると、点字ブロックを目印に「歩きスマホ」をする「点字ロスホ」という言い回しまであるという。そうした行為は意図的かどうかにかかわらず、人に危害を加えたり、自分が事故に遭ったりする可能性がある。点字ブロックの意義も、あらためて考える必要がある。(中村 真希子)

視覚障害者の被害 県内でも増加

長野市の女性(42)は弱視で視野も狭く、外出には白杖を用いている。8月下旬、「J」R長野駅前の広い歩道で、歩きスマホ中だったとみられる男性と衝突し、転倒。白杖は車道に転がって破損した。ぶつかった際、近くで目撃した人が相手の男性にも声をかけ、呼び止めてくれたが、男性は「お金がない」と言い訳をしてすぐに走り去ったという。女性はタクシーで帰宅。白杖は量販店で新調するしかなかった。

幼少期から失明の恐れのある網膜の病気や斜視があり、視力矯正によってある程度は見えていた時期もあったが、次第に病気が進行。現在は両目とも視力0.04程度で、視野は狭い。眼科通院などで定期的に市街地に出るが、最近4カ月だけで複数回、点字ブロック上で人とぶつかる事故に遭っていることを証言する。

長野駅前、路線バス停留所が並ぶロータリーに沿って点字ブロックが敷設。バスを待つ人がスマホを操作したままブロック上に立ったり、手荷物を置いていたり。歩きスマホのままスクランブル交差点を渡る姿もある。

県視覚障害者福祉協会(事務局・松本市)には「歩きスマホの人とぶつかった」「自転車とぶつかり白杖が破損した」といった報告がたびたび寄せられる。特に長野、松本市のように入道りが多い道沿いは、点字ブロックが整備されている一方、歩道の幅が広い。青木勝久理事長(71)「長野市」は「安全どころか道をあまり見ずに向かって来る人が多い」と指摘。「行政や警察に対策を求めても、実際は改善されないまま。歩きスマホは子どもや高齢者にとっても危ないので、やめてほしい」と訴える。

日本視覚障害者団体連合(東京)によると、最近、周りをよく見ずにスマホ画面に没頭する人が、足の感覚だけで方向を外さずに点字ブロックを進む場面を見聞きするようになったという。吉泉景晴情報部長(64)は、路上だけでなく、例えば階段の手すりのそばで立ち止まってスマホを操作する場合も障害者にとって非常に危ない」と説明する。

スマホの普及に伴い、この10年余で歩きスマホとみられる人とぶつかり、さらに暴言や暴力を受けた視覚障害者が出ている。吉泉さんは「点字ブロック上だけの問題ではなく、スマホを操作して周囲への注意や配慮が失われている」と懸念する。

長野市の女性は、今回の件で警察に被害届を出そうかとも考えたが、相手の特徴が分からず「諦めた」。以前から歩きスマホを恐れていたといい、「相手が障害者なら逃げ得、とされるような社会は嫌です」と悔しがる。かかりつけ医とも相談し、外出に同行・支援する福祉サービスが受けやすいよう、身体障害者手帳の申請手続きを進めている。

「周囲への注意や配慮 失われている」